

「おめでとう」の言語文化論
—祝福言葉の日英語比較—

松原健二
松原浩子

目次

- 第1章 はじめに
- 第2章 「おめでとう」と‘congratulations’の比較(I)
- 第3章 「おめでとう」と‘congratulations’の比較(II)
- 第4章 使用領域を規定している要因の分析
- 第5章 祝福言葉の言語文化的背景
- 第6章 人間と自然の捉え方
- 第7章 おわりに

第1章 はじめに

慶事や祝事をたたえる時に、私たち日本人は「おめでとう」という言葉をよく使う。この祝福言葉は、言うまでもなく「おめでとうございます」の短縮形であるが、一般的には「おめでとう」という簡略化された形で用いられることが多い。私たちは、日常生活のさまざまな場面で、この「おめでとう」という言葉をよく使う。

この祝福言葉である「おめでとう」は、一般に ‘congratulations’ という英語に対応すると考えられることが多く、日本における英語学習者の中には、「『おめでとう』 = ‘congratulations’」という形で覚えている傾向さえ認められる¹⁾。しかしながら、「おめでとう」と ‘congratulations’ の使われ方を詳しく比較してみると、両者は必ずしも完全に同義で、一対一対応をしているという訳ではない。確かに共通する部分も存在するのであるが、一方で使えて他方では使えない場合も認められるのである。

小論では、まず日英語の代表的な祝福言葉である「おめでとう」と ‘congratulations’ に焦点を当て、日常生活上のさまざまな場面を想定しながら、これらの言葉がどのような場面で使えて、どのような場面では使えないかを比較検証する²⁾。次に、そのような使用対象領域を決定している要因について分析し、更にはそれら両言語を母語として用いている人々の考え方や事物の捉え方について、比較文化論的な観点から考察を進めて行くことにしたい。

第2章 「おめでとう」と ‘congratulations’ の比較(I)

まず初めに、日本語の「おめでとう」が使われる代表的な例から見て行くことにしよう。

- (1-a) ご卒業、おめでとう。
- (2-a) 入試合格、おめでとう。
- (3-a) 部長昇進、おめでとう。

さて、これら (1-a) ~ (3-a) の日本語を英訳するとすれば、それぞれ (1-b) ~ (3-b) のようになる。

- (1-b) Congratulations on your graduation.
- (2-b) Congratulations on passing the entrance examination.
- (3-b) Congratulations on your promotion to manager.

このように、英語で祝いの言葉を述べる場合には、普通 ‘congratulations’ という語が用いられ、上記の例のように ‘Congratulations on~’ という表現で表されることが一般的である。それでは、次のような例はどうであろうか。

- (4-a) お誕生日、おめでとう。
 (5-a) 新年、明けましておめでとう。

これらの日本文に対応する英文は、次のようになる。

- (4-b) Happy birthday to you.
 (5-b) A happy new year.³⁾

ここで注意すべきは、(4-a) (5-a) いずれの日本文も適格な表現であるが、英語では ‘congratulations’ という語を用いて祝福することは出来ない。これは、‘congratulations’ の原義を考えれば、その理由は自ずから明らかである。そもそも ‘congratulations’ という語は、「努力して成功した人に対する祝いの言葉」である。実際に英英辞典にも、‘congratulations’ の語幹である動詞 ‘congratulate’ の定義として、‘to tell someone that you are happy because they have achieved something or because something good has happened to them’ (*Longman Advanced American Dictionary*) と説明されている。誕生日や新年は人間の意識的な努力によって獲得されるものではなく、時の流れというものによって時期が来れば自然に訪れるものだからである。したがって、(4-c) や (5-c) は一般に用いられることはない。

- (4-c) Congratulations on your birthday.
 (5-c) Congratulations on a new year.

さて以上の(1)~(5)までの例文での考察をまとめると、表1のようになる。

表1. 「おめでとう」と ‘congratulations’ の比較(1)

慶事の種類	卒業	合格	昇進	誕生日	新年
「おめでとう」	○	○	○	○	○
‘congratulations’	○	○	○	×	×

(○：適切、 ×：不適切)

表1によっても、日本語の「おめでとう」は英語の ‘congratulations’ よりも、使われる範囲が広い言葉であることが窺える。英語の ‘congratulations’ が使用可能な「卒業」「合格」「昇進」などは、人為的な努力によって達成される出来事である。このような意味的属性を便宜的に [+achievable] と名付けることにしよう⁴⁾。一方、‘congratulations’ の使用を許さない「誕生日」や「新年」は人為的な努力とは基本的に関係のない出来事であり、こちらは [-achievable] と表すことにする。

第3章 「おめでとう」と ‘congratulations’ の比較(Ⅱ)

前章では、日本語の「おめでとう」と英語の ‘congratulations’ をいくつかの例を挙げながら比較した。その中には、祝福表現としてほぼ同じように用いられる例も見られたが、「おめでとう」とは言えても、‘congratulations’ では祝福できない例があることも分かった。前章で取り上げた数少ない例だけでも、日本語の「おめでとう」と英語の ‘congratulations’ が一対一対応ではないことが確認できた。「おめでとう」の方が ‘congratulations’ よりも、使用される範囲は広そうなことも推測され得た。

しかし、これら日英語の祝福表現の差異は、「同じように用いられる」場合と、「『おめでとう』とは言えても、‘congratulations’ とは言えない」場合というように、明確に二つに分けられる場合ばかりではない。そこでこの章では、「結婚」「退院」「病気からの回復」「手術の成功」「宝くじに当選」といった場面での ‘congratulations’ という語の使用の可否について、考察を進める。

まず、「結婚」について見てみよう。

(6-a) ご結婚、おめでとう。

この (6-a) の日本文はよく使われる表現であるが、英語では、先の (1-b) ~ (3-b) の英文の場合とは異なり、‘congratulations’ という語が必ずしも英語として適切とは限らない。詳しく見てみよう。対応する英文としては、次の3通りほどの文が考えられる。

(6-b) Congratulations on your marriage.

(6-c) I wish you great happiness.

(6-d) Best wishes.

上記の英文のうち、(6-b) は一般に花婿に対する祝いの言葉とされ、(6-c) と (6-d) は花嫁に対して使われることが多い。また (6-b) の言葉を花嫁に対して用いると失礼になると言われることもある。これは、元来、結婚は男性が女性にプロポーズするものであり、(6-b) の英文を花嫁に対して言った場合には、「あなた、よく頑張ったあの男を口説き落とされたね」というような意味になってしまうので、失礼になるという理由によるものである⁵⁾。しかし最近はこのような考え方はほとんど見られないようになり、(6-b) の英文を花嫁に対して祝福の言葉として発しても特に問題はないようである⁶⁾。恐らくは、男女同権意識の高まりという社会的な要因が大きく影響しているものと思われる。

それでは次に「退院」を祝福する (7-a) の場合はどうであろうか。

(7-a) 退院、おめでとう。

この (7-a) の日本文もまた、退院した人に対して自然に発せられる日本語表現である。

しかし、これに対応する英語表現である (7-b) は自然に使われるのであろうか。

(7-b) Congratulations on your discharge from hospital.

ここで、(4)や(5)の例で見たように、‘congratulations’ という語の原義が「努力して成功した人に対する祝いの言葉」であることを考えると、退院に対する祝福の場合にこの語が使えるかどうかの判断は難しいところである。病気やケガが治って退院するという場合、積極的に努力したのは多くの場合は医師であり看護師である。病院から退院するとき、日本語では何のためらいもなく「おめでとう」という言葉を使えるのであるが、(7-b) の英文は英語母語話者には果たしてどのように響くのであろうか。

この点について、アメリカ・イギリス・カナダ・オーストラリア出身の英語母語話者10人に調査を行ったところ⁷⁾、全員が「このようには言わない」とか「この表現は strange な響きがする」と答え、代わりに (7-c) や (7-d) の表現に置き換えた。

(7-c) I'm glad you are out of hospital.

(7-d) I'm happy to hear that you are getting out of hospital.

ただし、そのうちの1人は、「長い入院生活の後の退院ならば、‘congratulations’ を使えないこともない」と答えた。以上のことから、「退院」に対する祝福表現としては ‘congratulations’ という言葉は適さないことが分かる。

それでは、長い闘病を耐え抜いて「回復」した場合には、‘congratulations’ という表現が使えるのだろうか。日本文は (8-a) であり、これに対応する表現として (8-b) の英文を、同じ英語母語話者10人に提示し、その表現が使えるかどうか、またどのように響くのかを尋ねてみた。

(8-a) 長い闘病からの回復、おめでとう。

(8-b) Congratulations on your recovery from your long illness.

結果は、6人が「不可」と答え、4人が「可」と答えた。ただし、「可」と答えた4人のうち3人が、(8-b) の英文から ‘from your long illness’ を除いた (8-c) の英文については「不可」と答えた。つまり、‘from your long illness’ の表現があるから「可」になり得ると言うのである。

(8-c) Congratulations on your recovery.

そしてこれは、「病気の程度、闘病の程度、回復への努力」により ‘congratulations’ を使うかどうか別れる。たとえば、(8-d) のように「風邪からの回復」には使わないが、これが、「病気の程度、闘病の程度、回復への努力」が大きくなると ‘congratulations’ を使う。たとえば、体が麻痺している人がリハビリに努力して回復したような場合、

(8-e)、(8-f) のような表現をして、相手を祝福するというのである。

(8-d) Congratulations on your recovery from your cold.

(8-e) Congratulations! You walked five meters.

(8-f) Congratulations! You opened the door by yourself.⁸⁾

以上のように、(7-b) から (7-d)、(8-b) から (8-f) を見てくると、‘congratulations’ という語が「努力して何らかの結果を出した人に対する祝いの言葉」であることが裏付けられる。これは、第2章で見た ‘congratulate’ の定義 ‘to tell someone that you are happy because they have achieved something or because something good has happened to them’ (*Longman Advanced American Dictionary*) から考えてみても納得出来るものである。

そこで、さらに同じ文でありながら、状況により、相手が「患者」と「医師」のどちらにも使える「手術の成功」に関して、同じく10人の英語母語話者に尋ねてみた。(9-a) の日本語は、手術を受けた患者に対しても、また、執刀した医師に対しても同様に言うことが可能である。

(9-a) 手術の成功、おめでとう。

それでは、英語の場合、「手術の成功」を患者に向けても、医師に向けても、‘congratulations’ という表現を用いて祝福出来るのであろうか。

(9-b) Congratulations on your successful surgery. (to a patient)

(9-c) Congratulations on your successful surgery. (to a surgeon)

これに対する英語母語話者10人の回答は、患者に向かって言う場合の (9-b) の英文については6人が「不可」で、4人が「可」であった。そして「不可」と答えた6人は、(9-b) の代わりに (9-d) (9-e) のような表現をすると答えた。

(9-d) I'm happy for you that your surgery was successful.

(9-e) You're OK. That's a relief.

ただし、「可」と答えた4人についても、「手術が難しい ‘serious disease’ の場合にのみ『可』である」と付け加えた。

次に、手術を執刀した医師に向かって言う場合の (9-c) の英文については、1人が「不可」、9人が「可」と答えた。「可」と答えた英語母語話者によると、その理由は「医師が執刀したから」、「何かをしたから」、「ほめ言葉、賛辞として言う」という説明であった。ただし、この場合にも、「手術の難しさにより、‘congratulations’ を使うかどうかは別れ

る」という回答を得た。つまり、日帰りでも済むような比較的簡単な手術には使わないが、「新技術を用いての難しい手術」が成功したときや、「十数時間もかかったような大手術」を成功させた医師に対してならば ‘congratulations’ と言う、というのである。以上のように、(9-b) から (9-e) を見てみても、‘congratulations’ という語が「努力して何かを成し遂げた人に対する祝いの言葉」であることが裏付けられる。

次に、何らかの偶然的な要因で大きな幸運に恵まれた場合の祝福表現について考えてみよう。たとえば、「宝くじに当選」した場合である。日本語では、普通、次のように祝福する。

(10-a) 宝くじ当選、おめでとう。

これに相当する英語表現は、次のような英文となる。

(10-b) Congratulations on winning the lottery.

宝くじなどのくじに当選する場合は、本人の努力というよりは幸運そのものによってもたらされる幸福であるが、そのような場合にも ‘congratulations’ を用いることができるのであろうか。これは、先に触れた ‘congratulations’ という語の原義が「努力して成功した人に対する祝いの言葉」であることと一見矛盾することのように見える。しかし英英辞典（前出）の ‘congratulate’ の定義の中に、‘to tell someone that you are happy... because something good has happened to them’ (*Longman Advanced American Dictionary*) という記載があることから考えると、宝くじなどに当選するような幸運に恵まれた場合にも、‘congratulations’ という語を用いて祝福できると推測できる。そこで、これに関しても同様に10人の英語母語話者に確認したところ、8人が「可」と答え、1人が「自分は使ったことがない」と言い、もう1人が「特に何もしていない」という理由で「不可」と答えた。この結果から考察すると、「誰かが何らかの幸運を得た」場合には ‘congratulations’ という語を用いて祝福しても、概ね問題はなさそうである。

さて、これまでの(6)~(10)の例文での考察をまとめると、表2のようになる。

表2. 「おめでとう」と ‘congratulations’ の比較(2)

慶事の分類	結婚	退院	病気からの回復	手術の成功 (患者に対して)	手術の成功 (医師に対して)	宝くじ
「おめでとう」	○	○	○	○	○	○
‘congratulations’	○	×	△	△	△	△

(○：適切、△：母語話者により判断が別れる、×：不適切)

表2によっても、英語の ‘congratulations’ という語は、日本語の「おめでとう」のようにどのような場面でも用いられる祝福表現ではないことがわかる。またその使用可否の判

断は、英語母語話者によっても異なることがわかった。そして興味深いことに、これらの判断の差異は、英語母語話者の出身地によるというのではなく、むしろ出身地にかかわりなく、個人個人によって差異が生じていることも明らかとなった。もちろん、今回の調査で協力を得た英語母語話者はわずか10人なので断定はできないが、その中で地域的な傾向が認められなかったことは、これらの判断の違いは出身地の英語の特性によるものと言うよりは、むしろ英語話者個人の感覚によるものであることを暗示しているものと考えられる。

ここで上記の(6)~(10)の例文で ‘congratulations’ を用いると答えた英語母語話者の数をまとめると、表3のようになる。

表3. ‘congratulations’ を用いると答えた母語話者の数 (10人中)

慶事の種類	結婚	退院	病気からの回復	手術の成功 (患者に対して)	手術の成功 (医師に対して)	宝くじ
‘congratulations’	10	0	4	4	9	8

表2および表3を見ると、‘congratulations’ を使用できる出来事であるかどうかについての判断は英語母語話者の中でも意見の別れるものがあり、簡単な法則によって線引きすることのできない問題であることが分かる。

第4章 使用領域を規定している要因の分析

前章までで詳しく検証したように、日本語の「おめでとう」は慶事や祝事を祝う時にはほぼどのような場合にも用いることのできる言葉である。それに対して英語の ‘congratulations’ は、用いる対象の範囲が限定されており、日本語の「おめでとう」に比べて狭い範囲でしか使うことができない。また ‘congratulations’ は使用の可否が明確な場合がある一方で、母語話者により使用の可否判断に差異が認められる場合も少なからず存在する。「おめでとう」と ‘congratulations’ が日英語における祝いの言葉の代表格であるにもかかわらず、このような差異はどのようにして生まれたのであろうか。また ‘congratulations’ の使用可否の判断は、どうして話者によって差異が生まれるのであろうか。本章では、これらの問題について考察を進めて行くことにしたい。

まず英語の ‘congratulations’ について、その用法の可否を規定している要因を探っていくことにしたい。前章までで見たように、‘congratulations’ という語は「努力して成功した人に対する祝いの言葉」を原義とするものである。したがって、言うまでもなく、この言葉で祝福を受ける人は、何らかの努力をして成功を勝ち取った人ということになる。それゆえ、この言葉が出現するには、その人の努力を重ねた上での成功なり栄冠なりが前提として存在することになる。たとえば例文 (1-b) においては、‘your graduation’ が祝福の対象事となっているが、‘graduation’ の意味自体に、聞き手である ‘you’ が「努力をして勉学を修めた」ということが意味的に内包されている。同様に (2-b) においては、「受験勉強に励んだ」ことが言外の意味として存在しているし、(3-b) においても、

「仕事に励んだ」ことが暗示されている。換言すれば、これら例文 (1-b) (2-b) (3-b) の英文においては、祝福対象事がすべて [+achievable] である。

次に、結婚を祝う表現について考えてみよう。前章でも触れたように、(6-b) の英文は花婿に対して言うのは構わないが、花嫁に対して言うのは失礼になるとされてきた。これは、英文 “Congratulations on your marriage.” において祝福の対象事となっている ‘your marriage’ が、「努力をして、結婚を承諾させた」ことを暗示するからである。現代では特にこだわりなく花嫁に対しても用いられるようになったこの表現が、伝統的に花嫁に対しては失礼だと考えられていたのは、この表現を用いることによってその結婚が花嫁にとって [+achievable] だと暗示することになるからであったのだろう。

次に「退院」について考えてみると、例文 (7-b) の英文が奇異な響きを持つのも、祝福の対象事となっている ‘your discharge from hospital’ が、本人が「努力をして病気やケガを治した」ことを暗示することになるからであり、これが実際の「医師が患者の病気やケガを治す」という積極的な行為や、人間の持つ自然治癒力の存在と共存しにくいからである。また例文 (8-b) として挙げた “Congratulations on your recovery from your long illness.” という英文が、‘discharge’ と意味的に近いものでありながら英文として適格だとした母語話者が存在するのは、そこに患者本人の「闘病」という [+achievable] な性格が含まれるように見えるからである。その証拠に、(8-b) の英文から ‘from your long illness’ を除いた英文や、‘long illness’ の代わりに ‘cold’ (風邪) を用いた英文は、いずれも許容する母語話者はほとんどいなかった。これらの操作によって、[+achievable] な性格が極端に薄れてしまうからだと考えられる。

さらに誕生日や新年といった慶事について考えてみると、(4-c) にしても (5-c) にしても、祝福の対象事となっている ‘your birthday’ や ‘a new year’ には誰かの意識的な努力の形跡は認められないのであり、これらはむしろ時の流れの中で自然発生的に生じる慶事であると言える。そのため [-achievable] な属性となり ‘congratulations’ の持つ原義とは意味的に離れるため、(4-c) や (5-c) は不適格な文となる。ところが興味深いことに、(4-c) の英文でも、状況によっては使用可能な場合があることが、ネイティブチェックで明らかとなった。それは、祝福を受ける人が高齢である場合である。80歳とか90歳といった年齢に達した人には、“Congratulations on your birthday.” と言えるというのである。これは誕生日というものが時の流れの中で自然に訪れるもので、一般的には [-achievable] な出来事であるにもかかわらず、極めて高齢に達した場合には当事者の長年にわたる人生の年輪が暗示されるために [+achievable] な性格を帯びるようになるためだと考えられる。同じ英語表現でありながら、対象者の年齢によって使用の可否が別れるのは、言語学的に面白い現象である。

ところで偶発的な要因によってもたらされた「宝くじ」の例においては、英語母語話者の判断が別れていた。10人中8人の母語話者が許容した一方で、2人の母語話者は不可と判断した。これは、やはり宝くじのような偶発的な幸運には、そこに [+achievable] な性格を認めづらいという感覚があるからだと想像される。

以上の考察で明らかのように、‘congratulations’ の使用の可否を規定しているのは、その対象事が [+achievable] な出来事か、[-achievable] な出来事かという点に収斂される。しかし実際には簡単に白黒をつけられる場合ばかりではなく、[±achievable]

というような出来事も多い。本章で見てきたように、「病気からの回復」「手術の成功」「宝くじ」などの場合である。そのような場合に‘congratulations’を用いて祝福するかどうかの判断は、あくまでその場の状況と話者個人の言語感覚によるものであることが確かめられた。

英語の‘congratulations’がその使用領域に制限が存在したり、使用の可否が曖昧な場合があるのに比べて、日本語の「おめでとう」は「卒業」「合格」「昇進」をはじめ、「誕生日」「新年」「結婚」「退院」「病気からの回復」「手術の成功」、ひいては「宝くじ」のいずれの慶事に対しても用いることができる。「おめでとう」はあらゆる慶事に対して用いることができる、と言えそうである。

ここで「おめでとう」の語源について辿ってみよう。そもそも、「おめでとう」の語幹である「めでたし」は「愛ず(めず) + いたし」から「めでいたし」を経て出来たもので、原義は「大変愛すべき有様だ」という意味であったという。(『奈良・平安ことば百話』) 元来「めでたし」は、「愛すべき」の意味であり、慶賀の意は上代には発生していなかったようである。それが後に慶賀の意を持つようになり、現代では元々の「愛すべき」の意味は消失してしまっている。しかし、そもそもの原義が「愛すべき」であったことが、ほぼありとあらゆる慶事に対して祝福言葉として用いられる底流となっているものと考えることが出来そうである。なお、あいさつ言葉の原義に関しては、中野(1982)に次のような記述がある。

あいさつ表現の原義というものは、現実の言語使用において、話者によって意識されているとは限らないし、中には、多くの人が改めて問われても知らないかもしれない。それでも、原義が現実の用法になんらかの制約を加えていることは見てきたとおりである。
(中野道雄「発想と表現の比較」(1982) p. 59)

私たちは日常何げなく「おめでとう」という言葉を使っているが、この言葉の原義によって、発話者である我々が無意識のうちにもその使用領域などについて支配されていることは、大いに考えられることである。

第5章 祝福言葉の言語文化的背景

前章まででは、日本語の代表的な祝福言葉である「おめでとう」と英語の代表的な祝福言葉である‘congratulations’を、それらの使用領域の違いに焦点を当てて検証してきた。本章では、それらの使用領域の違いを生じさせている言語文化的背景について考察を進めて行きたい。

人間の喜怒哀楽がほぼ人類共通のものであるとするならば、人間の社会生活における慶事や祝事の捉え方にも大きな違いはないはずである。もっとも、風俗・習慣などが違えば人間の感じ方は異なることも大いに認められることであろう。そのような喜怒哀楽の違いは、宗教的な問題が関わる出来事においては一層顕著に現れるものと考えられる。たとえば、ラマダンという絶食の戒律を守らない同胞に対する怒りは、イスラム教徒ならば共通

に持つものであろうが、イスラム教徒ではない者には想像しにくいものである。またキリスト教徒が復活祭を祝う気持ちは、キリスト教徒でない者には共感しにくいものである。

しかし、第2章・第3章で取り上げたような慶事は、祝い方の儀式や方法に違いがあるにせよ、祝うという感情自体は広く一般性のあるものと考えられる。人間生活の日常的な出来事においては、宗教や文化の違いを越えて、それに対する人間感情の共通性は極めて高いものと言うことができるだろう。世界のどこへ行っても昇進や退院はおめでたいことであろうし、事故や失敗は悲しく残念なことである。

それならば、日英語の代表的な祝福言葉である「おめでとう」と‘congratulations’に関して、それぞれが使用できる領域に差異が認められるのは何故なのであろうか。小笠原(1981)によれば、言葉の区分は、その言語を使う人々の文化や物の見方を反映している。

言語はある社会の生成とともに発達し使用されてきたものである以上、その単語(語彙)がその社会文化とさまざまなかかわり合いをもってきたのは自然なことである。そもそもある言語における単語のありよう、語彙の構造というものは、その言語社会の文化の基本であると言ってもよい。その言語にある単語(語彙)は、その言語社会における事象の切りとり方や分類のし方を反映しているということも同趣である。(小笠原林樹「語義の文化面比較」(1981) p.168)

この指摘は、人間がその言語表現において同じ言葉で言及する場合には、それらの対象をほぼ共通の事項として捉えていることを表し、反対に別の言葉で言及する場合には、それらの対象を異なる事項として捉えていることを意味している。そのような観点から表1を改めて見直してみると、英語の‘congratulations’に関して「卒業」「合格」「昇進」などと「誕生日」「新年」などの間で明確に使用の可否を分けているのは、「人間の行為の有無」という要因であることが容易に理解できる。「卒業」「合格」「昇進」などの場合には、そこに当事者の努力の形跡が前提となっている。それに対して「誕生日」「新年」などの場合には、人間の行為とは関係なく、時の流れと共に自然に訪れる出来事が対象となっている。このような出来事が慶事であることは、英語圏の人々にとっても共通であるはずなのに、‘congratulations’という言葉の使用がほとんど許されないのは、英語話者が「卒業」「合格」「昇進」などの慶事と「誕生日」「新年」などの慶事を、まったく別種類の出来事として捉えていることを示唆しているものと考えられる。

一方の「おめでとう」は、慶事に関しては全般的に何にでも使うことができる語である。これは、日本語話者がさまざまな慶事を「人間の行為の有無」という観点では分類していないことを示唆していると考えられる。言い換えるならば、「人為的に勝ち得た成功であれ、自然に訪れた特定の出来事であれ、慶事は慶事である」という考え方が根底にあるからこそ、同じ「おめでとう」という語ですべての慶事をカバーすることができるのである。

第6章 人間と自然の捉え方

ここで、やや演繹的に論を進めるならば、前章で考察した ‘congratulations’ と「おめでとう」という祝福言葉の使用可能領域の差異は、それぞれの言語を話す人々の自然観の違いを反映しているかもしれないと考えられるのである。

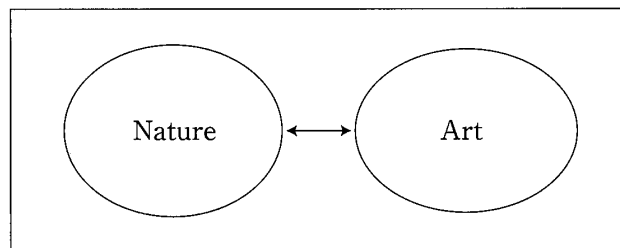
そもそも英語が生まれたヨーロッパの地では、狩猟から始まり、その後牧畜を生業とする時代が長く続いた。そのような生活文化圏においては、人間が知恵と体力を駆使して動物を飼い馴らし、自然に対抗して人間の生活を築き上げることが高く評価されてきた。この傾向は、17世紀以降の新大陸開拓の歴史を経て、欧米人の基本的な気質として形作られてゆく。松本（1994）は、このような経緯について、アメリカ人の気質を取り上げて次のように述べている。

アメリカ文化には主体的に流れを変えようとする『人為志向』の文化変形規則がある。新大陸に渡り、大く自然に手を加える開拓によって新しい国家を築いたアメリカ人は、〈論理主導〉で計画的に働きかけさえすれば、自然でも社会でも、必ずより良い物に〈する〉ことができるというアメリカン・ドリームを持っている。

（松本青也著『日米文化の特質』（1994）pp.118-119）

このような社会のもとでは、自然はあくまで人間が手なずける対象として捉えられる。人間が自然に挑み、開拓し打ち勝って、人間にとって有益な形に変えて行く。そのような姿勢こそが人間に必要なものと捉えられ、高く評価される。ここに、自然（nature）と人間の技術（art）の対立の構図が浮かび上がる。自然（nature）には人間は含まれないし、人間が人為的に作り出した技術（art）も自然とは相入れないものである。したがって、自然（nature）と人間の技術（art）の関係は、図1のようにまとめることができるだろう。

図1. Nature vs Art



それに対して日本では、一般に稲作を中心とした農業が主な生業であった。農業、とりわけ稲作においては、田植えから始まり刈取りに至るまで、すべて自然気象に伺いを立てながらの作業となる。いたずらに自然に挑むのではなく、自然の変化や季節の変遷、晴雨や寒暖、風の有無などの条件を見計らいながら事を進めないと、豊作という良い結果は得られない。ここに自然に畏怖し、自然を敬う心情が自ずと生まれ、人々の考え方の基底を

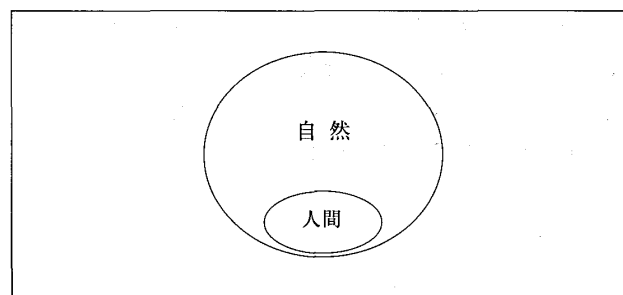
形作って行く。藤原（2005）は日本人と欧米人の自然観を比較して、次のように述べている。

欧米人にとって自然は、人類の幸福のために征服すべき対象です。しかし、太古の昔から日本人で、「人類の幸福」などという目的のために、「自然を征服すべき」などと思った輩は一人もいない。自然というのは、人間とは比較にならないほど偉大で、ひれ伏す対象だった。自然に聖なるものを感じ、自然と調和し、自然とともに生きようとした。そういう非常に素晴らしい自然観があったのです。

（藤原正彦『国家の品格』（2005）p.108）

このように農耕文化圏に属する日本においては、自然は人間と対立するものというのではなく、むしろ人間は自然の一部であり、自然と一体化して生きて行くという考え方が育まれてきた。そのような生活文化圏における自然と人間の関係は、図2のように人間が自然に包摂される形にまとめることができるだろう。

図2. 人間を包摂する自然



このような自然観の違いは、Tobioka et al. (1986) にも、次のように指摘されている。

Japanese and Western civilisations have often been contrasted as based on principles of harmony and antagonism. Japanese traditionally wish to live at peace with nature, which they regard as generous, while Westerners consider nature a hostile force which must be defeated. (Tobioka et al. *Japanese and Westerners* (1986) p. 47)

また「新年明けまして、おめでとう」という日本語の表現を考えてみると、興味深い事実が浮かび上がってくる。私たち日本人は、毎年何らのためらいもなくこの言葉を口にしたり年賀状にしたためたりすることが多いが、それでは一体この「おめでとう」は誰に対して発せられているものであろうか。この「おめでとう」は、話者から聞き手に対して一方的に発せられているというよりは、むしろ話者と聞き手が新年の喜びを共有していると言った方が適切であろう。日本語においては、人間を自然の一部として捉えるだけでなく、発話の聞き手である相手をも同胞として包み込むような意識で発話がなされていると考えることができる。このような場合の「おめでとう」という言葉は、“Merry Xmas to you.” というような一方向的な祝辞と同列の祝福表現ではないことは明らかである。

第7章 おわりに

小論では日英語の代表的な祝福言葉である「おめでとう」と‘congratulations’について考察を進めてきた。論考をしめくくるに当たり、最後に三つの点を指摘しておきたい。

まず、「おめでとう」と‘congratulations’というような一見同義に見えるよく知られた語においても、その使用可能領域について詳しく検証してみると、少なからぬ差異を認めることができた。そしてそのような差異は、偶然に生じたものではなく、それぞれの言語を母語として話す人々が歴史的・伝統的に培ってきた自然観や人間観を反映していると考えることができた。言い換えれば、言語表現上の一見些細な差異の中に、それらの言語を話してきた人々の持つ文化や伝統の片鱗を認めることができるのである。私たちは、日常何げなく言葉を使っているが、小論で検証したような祝福言葉が取り得る対象の選択制限についても、そこには文化的要因が見て取れるのである。

第二に、英語の‘congratulations’という祝福表現の対象となり得るかどうかを分けるのは、その対象事が[+achievable]な出来事か、[-achievable]な出来事かという基準であることが明らかとなった。日本語の「おめでとう」は[+achievable]な出来事にも[-achievable]な出来事にも用いるが、英語の‘congratulations’は、原則として[+achievable]な出来事、より正確に言うならば、話者が[+achievable]だと感じる出来事にしか用いることができないことを確認することができた。

第三に、ある出来事を[+achievable]だと捉えるか、あるいは[-achievable]な出来事と捉えるかには個人差のあることが明らかになった。これは話者の感覚的なもので、それを「正しい」とか「誤っている」と論ずることはできない問題である。私たちは英語教育や英語学習の場において、一つの英文が適切な英語表現であるかどうかということを考えることが多いが、そのような問題ははっきりと線引きが出来る場合ばかりではなく、今回考察した‘congratulations’を用いた祝福表現のように、その場の状況や話者の感覚によって適格性が左右される場合も往々にして認められることが分かった。またそのような感覚は、時代や社会状況の変化などにも影響を受ける形跡を認めることができた。

英語にしる日本語にしる、人間の使う言語は固定的なものではなく、辞書や文法書の記述だけではカバーし切れないさまざまな様相を呈する。そこにはその言語を使う者の感覚が介在するが、話者本人が気づかないうちに言語のたどってきた歴史や伝統の影響を無意識のうちに受けていることも多い。小論で取り上げた祝福表現の中にも、言葉と文化の密接な関係の一端を垣間見ることが出来たものと考えている。

謝 辞

小論の執筆に当たり、英文校閲などで松本大学の Oliver Carter 先生にお世話になりました。また、ネイティブチェックは信州大学の英語担当外国人教師の先生方に御協力をいただきました。この場をお借りして、御礼を申し上げます。

注)

- 1) Blundell et al. (1982) などによれば、'congratulations' はどちらかと言うと formal な響きを持つと考えられる。すると、対応する日本語はむしろ「おめでとうございます」の方が適しているとも考えられるが、小論では「おめでとう」という表記で統一して論を進める。
- 2) 会話は、交わされる状況や文脈により影響を受ける。また、当事者間の人間関係やその時の感情からも影響を受け、用いられる語や表現が変化するものである。しかしこれらすべての要因まで考慮して論を進めるとなると、分析対象が複雑多岐にわたることになり、ここで取り上げる問題についての論考が進めにくくなる。そこで小論では、「おめでとう」と 'congratulations' という表現がどの場面において使われ得るのかということに焦点を当て、論を進めて行くことにする。
- 3) 厳密に言うと、「新年、明けましておめでとう。」と“A happy new year.”には、実際の使用される状況に差異がある。これについては、松本&松本 (1993) に次のような記述がある。
「A happy new year! という新年の挨拶は、12月31日の夜、つまり New Year's Eve のパーティなどで、時計の針が1月1日に進んだ瞬間に、たまたまそこに居合わせた人同士が互いに交わす挨拶である。1月1日の朝がくると、もう何も挨拶しないのが普通である。英米に滞在している日本人が、日本の松の内のあいだ中「おめでとう」を連発する習慣で、1月1日に明るくなってから、あるいは7日まで、会う人ごとに A happy new year! と言うと、この人は何を寝呆けているのだろうか、といった顔をされ、怪訝に思われるので注意を要する。」 (松本安弘・松本アイリン著『英語のこころ』(1993) p.90)
- 4) [+achievable] は、「何事かを達成した」という意味素性を表示するために筆者らが便宜的に作った標識であり、'achievable' という語は、現代英語の既存の語彙の中には存在しない。
- 5) これには異論もあり、松本 (1977) には「これは女性がお嫁に行くということは、『人のものになる』という一種の悲しみを意味しているからです。男女同権の欧米文化にも、昔はこうした気持があったものとみえ、すくなくともことばの上では女の人に対してお祝いはいいません。」(p.101) とある。
しかしいずれにしても、この表現が花嫁に対して失礼になるという考え方はやや古い観念であり、現代では花嫁に対しても特にこだわりなく用いられることが多いようである。
- 6) この問題に関する今回のネイティブチェックでは、10人中9人が「新郎・新婦どちらに対する祝福表現としても問題ない」と答えた。そして残りの1人(60歳代)も「以前は、花嫁に対して用いるのは失礼だったが、今では、新郎・新婦のどちらに対しても同様に使う」と答えた。
- 7) この調査は、2006年10月に実施。出身は、イギリスが3人(男)、アメリカが3人(男2、女1)、カナダが2人(男1、女1)、オーストラリアが1人(男)、イギリス生まれのオーストラリア育ちが1人(男)である。この10人にネイティブチェックした限りでは、調査の結果に出身国ごとの傾向や性別による差異が現れるということとはなかった。
- 8) (8-e), (8-f) の英文は、“Congratulations on~” に続くかたちでの1文にはなっていない。これは、回答した母語話者が「1文で述べるよりも、“Congratulations!” と言ってから次の文を続ける形を好む」と答えたため、そのまま表記した。

引用文献)

- 小笠原林樹著 (1981) 「第4章 語義の文化面比較」; 『日英語比較講座第3巻 意味と語彙』大修館書店
中野道雄著 (1982) 「第1章 発想と表現の比較」; 『日英語比較講座第4巻 発想と表現』大修館書店
藤原正彦著 (2005) 『国家の品格』新潮社
松本青也著 (1994) 『日米文化の特質』研究社出版
松本亨著 (1977) 『書く英語—実用編』英友社
松本安弘・松本アイリン著 (1993) 『英語のこころ』丸善ライブラリー
Tobioka, K. & Burleigh, D. (1986) *Japanese and Westerners*. MacMillan Language House
Longman Advanced American Dictionary (2000), Pearson Education Limited

参考文献)

- 会田雄次著 (1972) 『日本人の意識構造』講談社
楳垣実著 (1961) 『日英比較語学入門』大修館書店
嶋田義仁著 (1998) 『稲作文化の世界観』平凡社
鈴木孝夫著 (1973) 『ことばと文化』岩波書店
馬淵和夫著 (1988) 『奈良・平安ことば百話』東京美術
森住衛著 (2004) 『単語の文化的意味』三省堂
和辻哲郎著 (1935) 『風土』岩波書店
Blundell, J., Higgins, J. and Middlemiss, N. (1982) *Function in English*. Oxford University Press